

有森信二

指を離れた石は真つ直ぐに飛んで、整体院の格子玄關の右下隅のガラスを射貫いた。健治は予想だにしない出来事に、カバンを肩に掛けたままその場に佇んだ。

整体院の玄關戸は上の部分がガラスになっており、板格子に表と裏から挟まれている。その右下の一枚を、直径二センチに満たない小石で碎き飛ばしたのである。石は足元の県道に転がっていた。どうして石を拾い上げ、整体院の玄關を狙ったのか、直前まで考えもしないことだった。

健治の家を出て中学校に通う、約五百メートルのなだらかな坂の道筋に整体院はある。整体院は県道に面しており、県道の反対側は木立の丘で、奥は十数基の墓地になっている。

やや日の落ちかけた秋の放課後である。整体院の玄關前に、よく熟れた柿の実が日の光を跳ね返していた。

「まあ、どうしたんでしょ」という声が内側に乱れた。健治はその場を逃げ出そうとは思っていないが、いつも笑顔を向けてくれる若奥さんらしい人の声を聞いた途端、咄嗟に身を翻し、後背の木立の中の墓地に走り込んだ。

軋んだ音をたてて引き違いの玄關戸が開かれ、二、三人があたりを見廻している。「誰かの悪戯かしら」「車が下って行つたとき、砂利を跳ねたのかもしれないね」「丁度バスが下る時間ですものね」と言いながら、割れたガラス片を拾い集めている。「一枚で済んでよかつたわ」と、笑顔のまま箒で掃いているのは奥さんである。

健治は木立に走り込む姿を誰かに見られたのではなかったか、と思った。「あ」と声にならない声が追い掛けてきたのを背中を感じた。きっと奥さんの声に違いないと思つた。

整体院の横は、朝夕の登下校時に必ず通る道である。箒の目を立てたり、洗濯物を干したりしている奥さんとは、よく玄關先で顔を合わせた。「頑張ってね」と奥さんはその度に言ってくれた。隣の県から嫁いで来たという奥さんは、決して綺麗ではないが、気持のいい人だった。

村の五月蠅い女性たちが、奥さんのことを悪く言わない腰の治療などに通う手前もあるのだろうが、「ちつとも飾らなくて、笑顔がいいのよ」という評判だった。商売のためのお愛想ではない、不器用なひたむきさがあるらしい。整体師の姑の見習いに励んでいて、客用のタオルを洗い干す姿も、決して手早いものではなかった。それでいて村の習慣に、懸命について行こうとしていた。

昨日の下校時、健治は玄関前の柿をカバン一杯に貰った。大きい甘みの強い柿で、舌の芯に沁みるほど美味しかった。「たくさんあるので、いつでも声を掛けてね」と、白い歯並びの奥さんは目を細くして言った。

あの奥さんに見られたのだ。健治が走り去る後ろ姿に、最初に玄関戸を開いた筈の奥さんは気付いたに違いない。「菅原家の兄弟みんなは、勉強がよく出来て素晴らしいわ」といつも言ってくれる奥さんの視線である。

何故、自分は石を投げたのだらうと考えた。悪戯でも悪態でもなかった。下校時に、県道で形のよい白い石に目が止まった。拾い上げ、眺める間もなく反射的に投げてしまった。としか言いようがない。

翌朝、整体院の玄関が見えるところまで近付くと、割れたガラスの一枚分に応急の厚紙が貼られているのを知った。通り抜けようとすると、笑顔の奥さんが箒の目を立てていた。挨拶をしようとする健治の言葉は、声にならなかった。顔も引き攣っていたに違いない。

奥さんは普段どおり「運動会の練習、頑張つてね」と白い歯並びを見せ、目を細くして言った。健治は玄関戸の方には目を向けず、頭を少しだけ下げ小走りに過ぎた。

授業中も、運動会の練習中も、玄関戸のことが頭を離れ

なかった。時間が経つにつれ、むしろ思いが増してきた。

一方で、一週間前の夕刻の出来事を思い出していた。すっかり日が落ちようとする時間まで、リレーの練習を繰り返したのだった。県道の砂利道が、薄闇にぼんやり浮いていた。

整体院を過ぎ、健治の家の畑の畦道まで来たときだった。畦道の叢の向こうから、男の低い声が聞こえてきた。

「最後や。ほんまに、亭主に熨斗は付けて返しちやる」男の声にはこのあたりでは聞かない、奇妙なアクセントがあった。男の膝下には、微かに腿の白さを覗かせた女の姿があった。「駄目、もう駄目なんよ」女が哀願しているのが分かった。

健治は足音をたてないよう、脇目も振らずに傍を通り過ぎた。二十メートル行っても、五十メートル行っても振り返らなかった。背中を、痛いほどの視線が貫いた。

了